

## 論文

## 杉山寧

—「永遠なるもの」と「乾いたもの」への希求—

松田 真理子

## I. はじめに

杉山寧は明治・大正・昭和を生きた著名な日本画家であった。杉山は東京美術学校在学中から頭角を表し、画家としての輝かしい一歩を踏み出したが、30代の約10年間は結核闘病に潰え、終戦を迎えている。さらに娘婿が三島由紀夫であったため、三島の自決はその後の杉山の生き方に少なからず影響を及ぼしたと考えられる。杉山の作品には生涯を通じて永遠なるものへの希求が見られるが、同時に彼には「乾いたものへの希求」が併存していた。芸術家が永遠なるものへの希求に自分の生涯を捧げることは、決して珍しいことではないが、「乾いたもの、乾いた大地」への希求は杉山独特の精神構造が影響していると考えられる。本論文では「永遠なるもの」と「乾き」への希求の両側面を検討し、杉山が日本画を通して探求し続けたものを中心に、敗戦、結核闘病、三島自決による影響も絡めながら、彼の精神内界の動きに肉薄してみたい。

## II. 杉山寧の来歴

杉山の来歴については後藤茂樹編集（1976）『現代日本の美術 第6巻 杉山寧』、井上靖・河北倫明・高階秀爾編集（1979）『カンヴァス 日本の名画 26 杉山寧』、河北倫明監修（1987）『20世紀日本の美術③ 杉山寧／松岡映丘』、

河北倫明・野地耕一郎編集（1991）『現代の日本画（8）杉山寧』、河北倫明監修（1991）『杉山寧 日経ポケット・ギャラリー 杉山寧』、川口直宜（1987）『杉山芸術を流れる河』、年譜 杉山寧（1987）、日本経済新聞社（1996）『杉山寧展 —永遠の造形を求めて—』、杉山寧（1989）『画作の余白に』、田中穰（1976）「杉山寧の人と芸術」に多くを負っている。

杉山寧は1909年（明治42年）10月20日に東京浅草に文房具店を営む父・杉山卯吉と母・みちの長男として生まれた。弟が1人いる。父は杉山が6歳の時に亡くなり、母は女手一つで2人の息子を育てた。1928年に東京美術学校日本画科に入学し、1931年に『水辺』が第12回帝展に、1932年に『磯』が第13回帝展に入選し、1933年に東京美術学校を卒業する際には卒業制作『野』が首席に選ばれ、多くの注目を浴びた。1934年に第15回帝展で『海女』が特選となり、師事してきた松岡映丘門下の有志と「瑠爽画社」を結成した。師・松岡は民俗学者・柳田国男の実弟である。1936年27歳の時に篠原元子と結婚したが、29歳の時に肺結核を患い、鎌倉で転地療養に努めた。33歳の時、約2ヶ月に亘り中国に写生旅行に出たが、帰国後再び咯血し、絶対安静を余儀なくされた。華々しいデビューを飾った20代に比べ、30代は結核闘病に潰え、思うような創作活動はできなかった。

1951年42歳の時に第7回日展に『エウロペ』を出展し、再び大きな注目を浴びた。1958年

に長女・瑤子が日本女子大英文科在学中に三島由紀夫と結婚した。1960年代前半は『林』『灼』『絡』などの抽象画を描き、1960年代中盤からエジプト、ギリシャ、エトルリアを旅し、古代美への憧憬を『悠』『穹』『水』『羊』などに表現した。

1966年に母・みちが亡くなり、1970年の三島自決前後から、杉山は『響』『生』『瞳』『季』などの裸婦像や『気』『囁』などの鳥をモチーフとした絵を描き、生命への賛歌を主題とした。それは女手1つで育ててくれた母、三島の荒ぶる魂に対する鎮魂と若くして寡婦になった娘に対する憐憫と慈愛が込められていたのかも知れない。1974年を最後に、杉山は作品を出品することはなくなり、主要な作品群でさえ1987年に回顧展が開催されるまで人目に触れることはなかった。1980年以降、カッパドキアを舞台に幻想的で深い静寂感に満ちた、時が止まったかのような作品群を生み出した。抜群の描写力と緊密な構成力によって、洞窟に隠れ住み、厳しい自然の中で信仰の証を刻み続けてきた古代キリスト教徒に対する共感の念を描出している。1980年代後半は敦煌や雲崗の石窟彫刻を描き、1986年の中国旅行をもとに『歴』を描いている。石仏の背景に描かれた紺碧の空は若き日に『穹』で描いたスフィンクスの背景の空と繋がっているのかも知れない。1993年10月20日、杉山は誕生日の朝に84歳の生涯を閉じた。

杉山は日展評議員、日本芸術院会員となり、1974年には文化功労者となり、文化勲章を叙勲されたが、芸術家としての栄達を極めた1974年以降、表舞台から再び身を引き、出展期日の時間枠に縛られることのない、杉山自身の時間枠の中で創作活動を意欲的に続ける晩年を過ごしたことは興味深い。

### Ⅲ. 杉山寧の作品

以下に杉山寧の作品について概観し、検討を加えていく。杉山の絵に関する解説は、後藤茂樹編集(1976)『現代日本の美術 第6巻 杉山寧』、井上靖・河北倫明・高階秀爾編集(1979)『カンヴァス日本の名画26 杉山寧』、河北倫明監修(1987)『20世紀日本の美術③ 杉山寧/松岡映丘』、河北倫明・野地耕一郎編集(1991)『現代の日本画(8) 杉山寧』、河北倫明監修(1991)『杉山寧 日経ポケット・ギャラリー 杉山寧』、日本経済新聞社(1996)『杉山寧展 —永遠の造形を求めて—』、小川正隆(1979)「杉山寧—その人と芸術」、小川正隆(1987a)「永遠の美に寄せる賛歌<『穹』>」、小川正隆(1987b)「完璧を求めつつ変貌する知性の画家」、谷川徹三(1979)「杉山寧の世界」を参考にした。

#### 1. 鮮やかな画壇デビュー

杉山は東京芸術大学在学中から帝国美術院に作品を出品し、特選をとるなど鮮やかな画壇デビューを果たした。『磯』(1932)は東京芸術大学在学中に描いた作品である。千葉県鴨川市の太海海岸に浦田正夫らと行き、目にした光景をもとに描いた。3人の女性は当時、杉山が住んでいた浅草の実家の近所の女の子がモデルである。海岸の岩、打ち寄せる波や海は木之華社を通じて松岡映丘に師事していただけた大和絵風の趣が強く感じられるが、一方で洋画の技法を巧みに折衷した迫真的な表現、細部にわたって的確な描写には、当時のモダニズム的な感覚をよく示している。帝国美術院第13回美術展覧会(帝展)で特選となった。

『野』(1933)は東京芸大の卒業制作であり、首席に選出された。武蔵野の風景を描きたいと考え、朝霞辺りにすすき野原を求めてスケッチ

をした。前景の草むらは萩窪、遠景が朝霞の辺りで、遊んでいる子ども達は近所の子どもにモデルを頼んだという。遠く広がる武蔵野の丘陵と夕焼け空のすすき野原で遊ぶ子ども達を、情感に溺れることなく、爽やかな感傷の世界に仕立て上げている。

『海女』(1934)は昭和9年の第15回帝展に出品し、再び特選となった作品である。この年の春に浦田正夫らと試みた志摩波切村付近への旅行にこの構想を得たという。波、海女、小舟の部分に至るまでスケッチを繰り返し、徹底した描写からは杉山のこの制作に対する強い意欲と周到な準備の様が窺われる。全体に洋画的な趣向が濃厚で、海女や小舟の細やかな描写からくる迫真性は速水御舟をはじめとする院展目黒派や国画創作協会の細密描写を思わせる。しかし杉山の興味は対象を写し取るのではなく、あくまでも自らの世界を平面上に確固とした造形手段として捉えることであった。

## 2. 10年以上の沈黙を破って

帝展で2回も特選をとり鮮やかに画壇に躍り出た杉山であったが、1938年秋に結核に罹患する。第二次世界大戦が始まり、杉山は1945年2月に海軍に招集されるが病身のために即日帰郷となった。1951年までの約13年間は作品の発表を控え、地道なスケッチなどを繰り返していた。

図1『エウロペ』(1951)は戦後始めて第7回日展に出品した作品である。不出品を続けていた頃、作画の研究をする一方で愉しんでいた愛読書の一つにギリシャ神話があった。その中でフェニキアの王アゲノルの娘エウロペに恋をしたゼウスが、牛に姿を変えて彼女に近づき、背中にエウロペが乗るとそのまま海に飛びこんでクレタ島へ渡ったという話は杉山の興味を強く惹いたようである。神津牧場に泊まり込みで

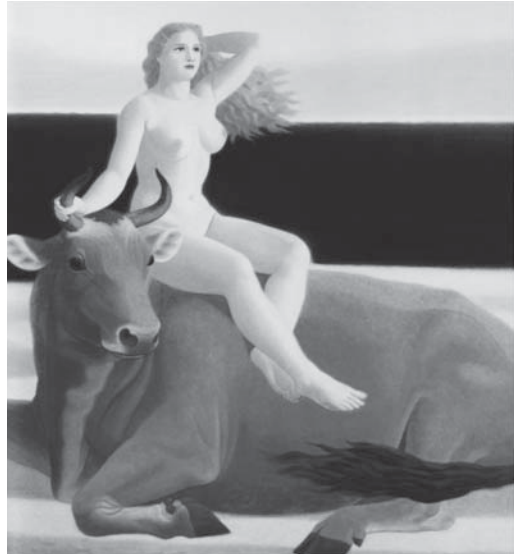


図1 エウロペ (1951年)

牛を、アトリエでは裸婦のデッサンに励んだという。作品が発表されるとその意表をついた題材の取り方に加え、明快な構図と牛やエウロペにみられる重厚な描写がきわめて斬新であり、新鮮な感覚を感じさせ、日本画に新しい局面を切り開いたものとして大きな反響を呼んだ。背景の黒い海は1935年に描いた『黒い海』が下地になっていると考えられる。

## 3. 抽象画による表現

1950年代後半から1960年代前半にかけて、杉山の画風は抽象的表現に移行していった。『耿』(1957)は東京の石神井公園の三宝寺池に取材した作品である。小下図と本絵で天地が逆になっていることから単なる風景画ではない。「私は目の前に存在している対象にひかれて、描くことはほとんどなかった。まず心に潜在しているイメージを基にして、自然の姿を求めることになる」と杉山は語っている。思い描いていた空間を実際の自然をヒントに画面に表現したものであると言えよう。「耿」には「ひかり」という意味がある。黄色、白を基調に、わずか

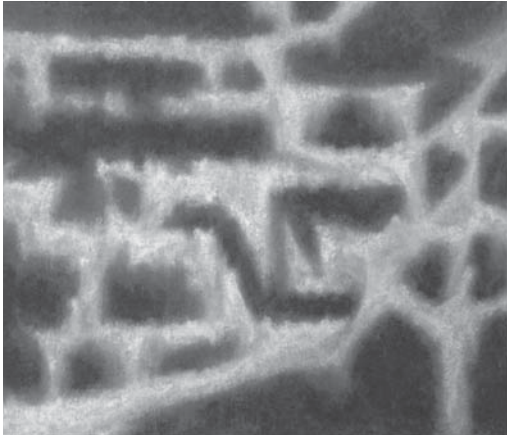


図2 黄 (1962年)

に明暗の調子をつけられた画面は微かな光りと影の交錯する空間となって、物音一つしない静寂な世界を作り出している。抽象的な画風の時代に入ろうとする直前の、あるいはきっかけとなったとも想像される作品である。

図2『黄』(1962)で描かれている赤く塗られた地の上を流れる黄色の物質は、どろどろとして粘液質であり、この頃の杉山の作品にしてはベタついた感じを呈している。この作品は地上に溢れ出した火山のマグマから発想を得たのであろうとする見方もあれば、完全に燃焼しきれない杉山の内面の表現とみる人もいる。いずれにせよ、この作品が抽象的表現を示す最後のものとなった。

#### 4. エジプトを題材として

1962年11月から1963年2月にかけて杉山はかねてより憧れていたエジプトを中心に、ヨーロッパ各地に取材旅行に出向いた。杉山はエジプト滞在中にルクソールやその周辺の数多くの遺跡を見て回ったが、それらの中で最も印象に残ったのは大ピラミッドとスフィンクスだったという。長い歴史の中でなお厳然として荒地に聳える二つの古代遺跡に深い感動を受けた。『悠』(1963)はエジプトに直接取材した出

品作としては最初のものである。直前の抽象的作風とは一変して明確な具象性を回復しており、確固とした構成と重厚な描写に、時間を越えた揺るぎない存在から受けた深い感動をしっかりと描きとどめている。「悠」は「ユウ」と読み、とおい、はるか、という意味である。

図3『穹』(1964)には広く張って大地をおおう大空という意味がある。どこからともなく差し込む一条の光、その下で果てしない時間の流れに身を任せ、スフィンクスが謎を秘めたまま悠然と座している。緊密な構成に、キャンバス地にカゼインと砂を混ぜた厚塗りのマチエールが強い造形感覚を示しており、そこに永遠の造形性を求めてこの作家が獲得した独自の世界をはっきりとみてとることができる。単純な構成ではあるが、かえって雄大で圧倒的な迫力を感じさせる。

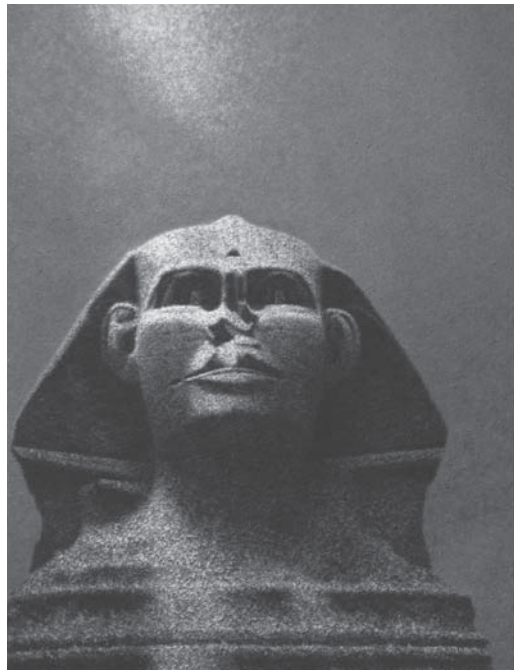


図3 穹 (1964年)

## 5. 裸婦像

杉山は1969年から1974年にかけて同一のモデルを用い、裸婦像の連作を描いた。『晶』(1969)は裸婦連作の最初の作品で、1969年の第1回改組日展に出品された。モチーフを裸婦にしたことについては特別に人物に限って考えたわけではなく、新たな空間構成を考えていた時にたまたま思いついたという。水中を泳ぐ2人の裸婦像は縦と横の形態による空間構成である。光は画面右上と左側の三角形の穴から差し込んでいるようで、薄明かりの空間に泳ぐ裸婦の身体を美しく照らして幻想的な雰囲気を湛えている。裸婦の素描は室内でモデルに自由に泳ぐ姿勢をとってもらいながらデッサンしたという。「晶」は「ショウ」と読み、澄みきって輝いているさまをいう。

図4『響』(1970)は画面中央の右上と左下に三角形の岩組みがほぼ対称的に配置されている。これを水平の線として、それに対するよう



図4 響 (1970年)

に垂直に落ちる水流と、石の上に横たわる裸婦を組み合わせている。本来は不自然なポーズである裸婦も全体の構成の中では見事なバランスを保っており、自然と一体となって見る者に不自然さを感じさせない。周到的な計算による揺るぎない画面構成により外に拡大していくような空間が創造されている。

この作品の発表中に三島由紀夫は自決した。

## 6. カップドキアを舞台に

1978年以降、杉山はトルコのアナトリア高原にあるカップドキアをしばしば訪ねた。もとは原始キリスト教の修道士達が多く集まった荒涼とした風景を表現している。『晶』(1981)はその第一作にあたり、「ガン」と読み、山の巖を意味する。奇妙な形の岩山が連なり、至る所に廃墟となった洞窟の入口が黒々とした穴となって見え隠れする。画面中央に大きく横たわる暗闇はひときわ異様に、時空を超えてすべてが絶対の沈黙の中に戻っていくようである。

## 7. 永遠なるものを求めて

図5『歴』(1987)は1986年の中国旅行から生まれた作品である。戦前にも一度写生したことのある雲崗第20窟の三尊仏の脇侍がモチーフになっているが、顔は本尊のものであり、指は欠けている部分を想像で補ったという。右斜め下に向かってせり出すような形の仏顔に対し、巻雲のうっすらと浮かぶ紺碧の空は印象的である。杉山にとって空は特別な意味があるように思われてならない。スフィンクス上部に広く張って大地をおおう大空と、欠けて断面をみせる光背の背後に広がる空間とはおそらく同質のものであろうし、スフィンクスや仏像との対照の中で悠久の時間の流れと、悠揚として迫らぬ空間とを象徴している。



図5 歴 (1987年)

#### IV. 杉山に関する先行研究

寺田 (1971) は杉山の芸術の変遷を辿りながら、杉山が獲得したものと喪失したのについて述べている。東京芸術大学在学中に画壇に華々しいデビューをした杉山であったが、師・松岡映丘の死後、結核に罹患し20代後半から40代前半にかけて杉山は画壇の表舞台から姿を消した。1951年(昭和26年)に『エウロペ』を携え、10年以上の沈黙を破って画壇に戻り、その後の数年間は抽象系の作品群を生み出しているが、『黄』(1962)が生まれる頃、杉山は「絵というものがだんだん判らなくなってきた」と漏らしたという。寺田は描写力に秀でた画家が造形表現の明確な手がかりを失おうとする絵画崩壊の不安、危機にあったのではないかと指摘している。

『黄』出品後、杉山は1962年11月から約2ヶ月の間、エジプト、ヨーロッパに旅行し、帰国後はスフィンクスを描いた『悠』(1963)を生み出す。寺田は杉山の描写的確さ、簡潔、流麗な線により、対象を構図とともに絵画化され

た次元の異なる美として捉えていると述べている。ヨーロッパ絵画の素描が対象を追究し絵画化するための過程に重点があるとするなら、日本画の素描は過程ではなく、下絵に近い段階から出発しており、前者の素描線が油絵に移ると大部分が消えてゆくのに対し、後者の線は本画まで移っていき、線に対するヨーロッパ人と日本人の考え方の差が現れているという。そもそも物体に線などあるわけではなく、物質と物質の境界だというヨーロッパ的感性と、物体を線で見、そこに美を感じる日本的感性の差を指摘している。

寺田 (1971) は杉山の知的構成、色彩、マチエールに対する繊細で周到的な配慮完璧感への追究を高く評価すると同時に、ヨーロッパ絵画のリアリズムと厚塗りマチエールの導入は素描と矛盾する要素を持っているために、素描は伝統的日本画の要素を多く持つ一方で、本画はヨーロッパ絵画のリアリズム導入という点に矛盾と未解決があると述べている。厚塗りと線を両立させる方法として平山郁夫が掘り塗り法を活用しているが成功してないという。

伝統的日本画は対象の捉え方も表現の仕方も共に対象の物質性を飛びこえ、媒介とせず、その印象を直截に捉え、画家のイメージとして表現することにリアリティがあるという。線による把握平塗り(マチエールによる物質感表現を重視しないこと)が可能であり、暗示性や象徴性が有効に働くという。寺田は杉山がその進路で獲得したものと失った(あるいは捨てた)ものがあり、すぐれた芸術には深い象徴性が必要だという美学を信じるなら杉山の芸術には重大な問題があると指摘している。

川口 (1987) は杉山が1950年代後半から1960年代にかけて発表した抽象的絵画は色彩、構図、マチエール等きわめて知的に緻密に描かれており、抽象絵画であっても実際にはある具

体的イメージがあり、それを基に制作していると述べている。『エウロペ』は斬新な発想、優れた造形思考、戦後における日本画の国際性を志向した点を特記し、本作品は杉山のロマン性と理性的側面を示していると指摘している。

野地 (1991a) は杉山の『エウロペ』は明らかに洋画的量感と明度に表現の比重を置きながら、同時に東洋画の厳しい描線と余白の空間意識から生まれた象徴性が見られ、戦時中の杉山がひたすら学んだ宋元画の高い調子が生かされていると述べている。そして造形の確かさと共に無限に広がる空間が見事に手を結んだ戦後の新しい日本画と呼ぶに相応しい画面が実現しているとし、12年に及ぶ長い沈黙の時代は、杉山にとって東洋画の写実によって対象認識と強い造形の表現とが完全に自分のものとして成熟するために必要な時間だったと指摘している。杉山は1974年(昭和49年)の日展に裸婦連作の最後を飾る『季』を出品した後、公的展覧会への出品を打ち切り再び沈黙に入った。野地(1991b)は徹頭徹尾、完璧さを要求する杉山にとって時間的制限から解放され、自由に制作したい欲求によって一切から自分を解放したと指摘している。

尾崎(1996)は裸婦シリーズを最後に杉山が日展を離れた後、トルコの Cappadocia 風景に作者が晩年たどり着いた独自の境地を遺憾なく発揮していると述べている。Cappadocia は4、5世紀頃からキリスト教修道士が入り込み、最盛期の9、10世紀頃には多くの洞窟寺院が造られたという。杉山は1978年にこの地を初めて訪れ、「特定の風景を描くことはない」「潜在しているイメージを基に自然の姿を求める」「心象の風景こそ私の世界」と述べている。尾崎は全てを否定する自然の中で敢えて自らを浄化しようと試みる人間の営みさえも、やがて化石と風化させていく天地の狭間に、すべてをのみ込

んで悠久の時の流れを刻む永遠の世界を杉山は読み取っていたのではないかと指摘している。

## V. 考察

### 1. 杉山寧の人格構造と精神状態

#### (1) 人生早期における父の喪失

杉山が6歳の時に父は他界し、その後は母が息子2人を育て上げた。母は父の死後しばらく経ってから文具店を閉じたが、土地や家作があり、生活にはあまり不安はなかったという。母は再婚しなかったため、杉山は「父」という存在を欠いて成長した。杉山は東京美術学校在学中から松岡映丘に師事しており、卒業後は松岡の率いる研究会「木之華社」の例会に時折出席するようになる。その後、松岡の助言により、松岡門下の浦田正夫、山本丘人、阿部貞夫、岡田昇などの若い世代の有志と一緒に「瑠爽画社」を結成した。彼らは月に1、2回会員の家に順番に集まり研究会を開き、後に高山辰雄も参加している。

27歳で篠原原子と結婚し、翌年には長女瑤子が生まれ、29歳の時に長男章が生まれるが、同年に恩師・松岡映丘が死去した。杉山(1989)は松岡の死去に際し「まだ切実な悲しみと云うことを知らない程幼い時分父を失った自分はそれ以来それ程の悲しさを知らないで来た。今画業の父であり人間の指導者であった松岡先生の卒去に逢い、初めて知己を失った悲しみと淋しさをしみじみと知った」と記している。恩師・松岡の死は幼少期における実父との死別よりも実感を伴う深い悲しみであったと考えられる。杉山にとって実父の死は幼すぎたが故に切実な悲しみとは結びつかず、父の死による影響は彼のその後の人生を支配するほどの起爆力にはならなかったと考えられる。実父が文具店を営んでいたことは、彼を画業に向かわせた一要因に

はなつたかも知れないが、むしろ、画業の師であり、人生の師である松岡こそが杉山にとって「実質的な父」としての影響を与えたと思われる。松岡は強気や潔癖さのために世間から皮相的にみて誤解を招いていた感が甚だ多いが、杉山は「先生は寧ろ人が良すぎて損をした人」と見なし、松岡の傍にいる者だからこそ知り得る松岡の姿を描写している。杉山は松岡の画家としての品格の高さを崇敬し、世渡りの下手な実直さにむしろ、信頼を寄せていたのではないかと思われる。

松岡の死に瀕し、「幾多の雑路を前に自分の画道を照らす灯火を失って呆然としている。永久に取返しの付かない不幸であった」とも述べ、松岡を失った喪失感の大きさを記している。松岡を失った打撃は同年秋、杉山が結核罹患し咯血するという形として現れ、胸を蝕むほどの破壊的な悲しみであったと推測される。6歳で実父を喪い、10代後半で巡り会えた松岡とも約10年後には死別したことから杉山は「父なるもの」とこの世的な繋がりとは縁遠い存在であったのではないかと考えられる。杉山の母が若くして寡婦となったように、杉山の娘・瑤子も若くして寡婦となったことは杉山をとりまく女系家族が担わされた或る宿命、さらには杉山が担わされた宿命を感じさせる。それは6歳で父を喪った杉山が寡婦を貫いた母にとって幼いながらも「父の代わりとしての一家の柱」「弟の父」としての役割を期待された存在であり、若くして寡婦になった娘・瑤子にとっての杉山は「父と夫を兼ねた存在」としての役割を担っていたことを意味するのではないだろうか。「父不在」は杉山の実生活においては「父役割」の過剰として杉山自身の軛となっていたとも考えられる。同時に杉山の母も娘・瑤子も死別による夫の不在を嘆くだけでなく遺児達を育て上げる逞しさが備わっており、杉山の血族における

女系の力強さが感じられる。

## (2) 結核罹患がもたらしたもの

杉山は1938年、29歳の時に画業においても人間的指導者としても父として慕っていた松岡が死去し、同年に結核に罹患した。結核罹患は表舞台における華やかな活動を差し控えることに繋がったが、結核闘病時期が第二次世界大戦の時期とびつたりと重なり、最前線で闘うことを免れたという逆説的幸運にも恵まれたと言えよう。杉山は二男二女の4人の子どもに恵まれ、何としてでも生き延びて「父」としての責任を果たせねばならないという思いも闘病を続ける強い動機付けとなっていたのではないだろうか。松岡門下の若手画家たちと結成した瑠爽画社は杉山が病に倒れた後、すぐに解散となり、公の展覧会から杉山の名前は消えることになった。野地(1991a)は12年に亘る沈黙は結核が直接的原因ではあったが、杉山は絵筆をとらなかつたわけではなく、東洋画の表現方法をさらに追究する努力をしていたと指摘している。杉山(1989)はその頃を回想し、日本画を含む東洋画の表現法について考えていくと中国の宋・元時代の図録を集めたり、日本にある作品で博物館や個人所蔵のものなど紹介があれば見られるものなどを出来るだけ多く見て回ったと述べている。そして身体の無理を押し付けて大同石仏を見に行ったのも東洋画の本当の良さを本場のものので実際に見たかつたからと記している。

闘病期間中の花鳥や静物を描いた沈静な画面の裏に堆積した画家の無言の燃焼と消費が見られると野地は述べている。終戦後、新たに組織された日展から杉山は再三出品を強く要請されたが、これを断り孤立を続けた。杉山(1989)はその頃の心境を「いまのような混乱の時代では、誰も宗教的な素直な線を引くことは出来ない。社会の動きと美術は密接につながっていま



す。乱れた世相のなかでは、画家の描く線も自然に乱れがちです。・・・戦前も戦争中も、絵が浮いて、弱くなっています。私は、はじめからやり直したい。目指すところは漢時代の美術にみられる力強さです。とにかく絵画は“行”の集積で、高いところを狙わなくては、志高い絵は生まれません」と述べている。杉山は徹底的に自己の信ずる芸術思考を深め、絵画の本質を見極めることに専心し、あえて画壇から遠ざかっていたとも考えられる。

沈黙を破って第7回日展に出展した『エウロペ』はギリシャ神話に題材を得たものであり、画面は明らかに洋画的量感と明度に表現の比重を置きながら、東洋画の厳しい描線と余白の空間意識から生まれた象徴性が見られ、戦時中に杉山がひたすら学んだ宋元画の高い調子が生かされている。そこには造形の確かさと共に無限に拡がる空間が見事に手を結んだ戦後の新しい日本画と呼ぶに相応しい画面が実現している。12年におよぶ長い沈黙の時代は、杉山にとって東洋画の写実による対象認識と強い造形の表現とが完全に自分のものとして成熟するのに必要な時間だったと考えられる。

### (3) 娘婿・三島由紀夫と彼の自決による影響

三島は杉山の長女・瑤子と1958年6月に川端康成の媒酌のもと、見合い結婚している。瑤子は日本女子大学英文科在学中の20歳であり、結婚を機に大学を中退した。三島が瑤子を選んだ理由として、「芸術家の娘であり、芸術家に対して何ら幻想を持っていないからだ」と語ったという。さらに瑤子が三島よりも小柄だった点も挙げられる。瑤子は三島を一目で気に入り、瑤子の強い願望により、三島が押し切られた形で結婚したと言われている。瑤子が三島と結婚してから1962年以降は杉山の画風は象徴的表現の時代が訪れる。象徴的表現は杉山の新たな

挑戦であったが、本来、具象的表現に秀でていた杉山にとって新しい画風の導入は精神的崩壊の危機も招いたようである。象徴的表現による最後の作品を描いた後、エジプトを訪れ、帰国後は得意な具象画表現に戻ることで精神的均衡を取り戻したかのように思われる。

1969年には裸婦シリーズの第1作目を発表するが、裸婦シリーズ第2作『響』(1970)を発表中に三島が市ヶ谷の自衛隊総監室で自殺を遂げた。杉山はその後も裸婦シリーズを描き続け、『季』(1974)の発表により5連作の裸婦シリーズの完了となる。裸婦連作の最後の作品を発表した後、11月に文化勲章を受章するが、杉山は日展をはじめ公的な展覧会への出品を打ち切り、再び沈黙に入った。

33歳で寡婦となった瑤子は再婚することなく長女・紀子と長男・威一郎の2人を育てた。瑤子は能楽や神道に造詣が深かったと言われ、三島の蔵書や遺稿の保存整理に心を砕いたが杉山が84歳で永眠した2年後の1995年に自宅で心不全により58歳の生涯を閉じた。25年間に亘り寡婦を貫いた瑤子にとって父は大きな後ろ盾であり、父の死は彼女の命の灯火にも大きな影響を与えたのではないと思われる。

杉山自身の回想には娘婿・三島の自決に触れたものは一切なく、杉山に関する先行研究においても管見の知る限りでは、三島の自決が直接的に杉山の画風に影響を与えたという論旨は見出せていない。三島の自決後も裸婦シリーズを泰然と描き続けたという、「おれのなさ」に筆者はむしろ、杉山の心の動揺を見る思いがする。画材のテーマや画風を変えず裸婦シリーズを三島の死後4年間、描き続けた背景には、テーマや画風を不動にすることで、杉山が精神内界の動揺から自らを守ることに一定の成果を挙げたのではないかと筆者は推測する。

現実面に於いて、杉山が公的立場から一切

身を引くという晩年の在り方には三島の自決による影響があったのではないと思われる。三島は45歳の若さで現世における栄達とは決別し、死と引き替えにその名を文学史並びに昭和史に留め、逆説的に不動の地位を得ることに成功した。一方、杉山にとっては公的立場から身を引くことで時間的制約から解放され、画作三昧の日々を送ることそのものが真に欲するところであったのではないと思われる。三島の自決は1968年にノーベル文学賞が三島ではなく川端康成に与えられ、2人の間に大きな溝ができたことが一因として挙げられている。1970年に三島が自決し、その2年後に川端康成も自殺しており、文壇には「ノーベル賞が三島と川端の2人を殺した」という通説があることをDonald Keeneは回想している。三島はノーベル賞という世俗的評価のために命を落とした側面も考えられるが、杉山は文化勲章という世俗的評価を受けながらも、「世間の評価」とは異なる次元を目指すことに重きをおいたのではないかと考えられる。三島自決の4年前に母・みちが死去したことも杉山にとって人生の服喪の時代の訪れを意味していたのかも知れない。晩年に Cappadocia を何度も訪れ、原始キリスト教徒達の修練の場を描き続けた背景には母や三島への鎮魂の念があったのではないだろうか。

杉山と三島の共通点として、三島が絶筆となる『豊饒の海』の4部作で輪廻転生を軸に時空を超えた永遠なるものを探求したように、杉山は絵画を通して永遠なるものの追究に我が身を置いたのではないだろうか。

#### (4) 夜型の創作活動と「乾いたもの」への渴望

杉山(1989)は夜中に仕事をする画家であった。調子が出てくるのが夜の9時か10時頃で、そのまま明け方まで仕事をし、昼間に寝て、夜の7時頃に起き出す、という昼夜逆転の生活を

送り、1年のうち正月の三が日だけは人並みに朝起きて、家族と共に正月を祝うのが我が家の習慣であった、と記している。夜型になったきっかけは子ども達がアトリエに入ってくると、どうしてもその相手をしてしまうので子ども達が寝静まってから仕事をするのが生活リズムになったという。また昼間は来客があったり、電話が架かってきたりと仕事に集中しにくいこともあったという。

しかし、杉山が夜に創作活動をするようになった最大の要因は昼、アトリエに入る陽の光による煩わしさであったと考えられる。杉山の画室は東と南が全面あいており、障子が入れているが、障子にさす陽や木の影などがまぶしく落ち着けないこと、制作のモチーフである花や生物の色がくるくると変わってやりきれなくなり、厚手のカーテンをつけることに至ったという。杉山にとって昼間の光は創作を妨害する要因そのものであった。光に対する感受性の鋭さは芸術家としての感性かも知れないが、ある種の感覚過敏の側面とも受け取れる。

杉山(1989)は自分の仕事のやり方として、「自分の創った空間に、心に残っているものの印象を表現するわけだから、目の前にはほかの自然物が見えていない夜のほうがつごうがいいといえるかもしれない」とも述べている。そして他者からは瑞々しい世界を追究していると思われがちだが、そのような作品を描きながら「逆に乾いたもの、ドライなものに引かれる」と述べ、エジプトやスペイン旅行の際にドライな風土を目の当たりにし、つくづくそのことを感じた」と述べている。杉山が「乾いたものにひかれる」と述べている背景には何があるのだろうか。

杉山(1989)は1962年末からエジプト、ヨーロッパに出かけたがエジプトでの最も強い印象として初めてピラミッドを背景にスフィンクスを目前にした時のことを挙げている。「人間に

よって一塊の岩石から生まれ、又元の岩塊に還りつつある、この傑大な石像は、民族を越えた、人類と自然とのもつ最も優れた遺物と云えるであろう」と記している。杉山は古代エジプト人が「永遠」を信じ、それを石に刻み残そうとしたのも、太陽と砂と限りない空間のせいだったかも知れないと述べ、荒涼たる自然に抗する人間の表現力、底力を感得している。そして杉山は古代エジプト人の「永遠の生命」という考え方や、それに伴う各種の神の創造、形而上のものを様々な形に表現しようとしている超現実性などに心を重ねている。

杉山は1978年から晩年にかけてカッパドキアを歴訪し、カッパドキアを題材とした多くの作品群を描いている。カッパドキアは原始キリスト教徒達が地下都市を造り修行に沈潜した土地であり、「乾いた」地である。また、1942年には中国の大同雲崗に、その44年後にも中国の大同、敦煌、西安を訪れ、帰国後は石仏を中心とした作品を発表している。およそ半世紀を挟んで訪れた中国の大同や敦煌は中国の砂漠地帯にあり、中国においても杉山の関心は都市部ではなく、「乾いた地」にある。

杉山が初めて中国の大同を訪れたのは結核療養中であり、帰国後に無理が祟り、再び咯血しているが、中国訪問は結核闘病による静かな日常生活に良きにつけ悪きにつけ大きな起爆剤として作用したと思われる。また、『エウロペ』を発表し、画壇に甦った後、抽象画の時代を迎えるが、『黄』（1962）が生まれる頃、寺田（1971）が指摘した如く、描写力に秀でた画家が造形表現の明確な手がかりを失おうとする絵画崩壊の不安、危機にあったのではないかと思われる。『黄』発表後、杉山が初のエジプト取材に旅立ったのも精神的危機に陥りかけていた自分を非日常的空間に置くことで新たな境地を見出す糸口を求めていたからではないだろうか。

娘婿の三島由紀夫が自決した後、杉山は文化勲章を叙勲され、文化功労者として表彰されるが、1976年には日展理事会を退会し、全ての公の立場から身を引き、再び沈黙の時代に入る。その後、1978年以降、カッパドキアを幾度も訪れ、荒涼とした奇岩広がる厳しい自然の中で修行に励んだ原始キリスト教徒達に自分を重ねたかの如く、静かだがたゆまぬ創作活動を続けていた。杉山が人生の岐路に立ったときに選び取った空間が中国、エジプト、トルコといった荒涼とした風景に巨石がそびえる土地であったことに何らかの共通点を見出すことができるのではないだろうか。悲しい時は哀しみの旋律、喜びの時は喜びの音色という音楽における同律の法則のように、杉山の心の渇きは乾いた大地こそが包摂してくれたのだと言えまいか。

#### (5) 杉山の愛読書と絵画表現における探究

杉山（1989）は「一冊の本」と人から尋ねられた時、東京美術学校在学中に出会った『朝陽字鑑精萃』を挙げている。これは昭和4年、西東書房から出版されたもので著者は高田忠周という文学者であり、辞典ふうに整理された古文字の形を味わい、以来、この本は杉山の座右を離れなかったという。この本から杉山は絵と文字の区別のつかない世界の人間のたくましい意志的な形象化への努力に胸打たれると述べている。そして絵画も文字も出発点は同じところであったであろうが、時代とともに文字は達意という機能を強め、絵画は色彩や線で形象の美しさを主張し、両者は別々のものとなってしまったが、文字というものに固定しなかったころの文字的記号の表現に深い興味を示している。そして「さまざまな事物や概念を視覚化しようとする意志」を今日の絵画の問題として如何に生かすかについて触れている。

「目の前に存在している対象にひかれて、描

くことはほとんどなかった。まず心に潜在しているイメージを基にして、自然の姿を求めることになる。特定の風景を描くことはないし、従来のいわゆる純然たる風景画を描こうとも思わない。言ってみれば心象の風景こそ私の世界なのである」と述べている。そして「私は動物や植物を通じて、宇宙にひろがる自然の美しい神秘性を表現したいからで、自分が夢みるその空間に、心のなかの動物あるいは植物を借りてくるだけのことにすぎない」とし、描き上げられる画面構成はその絵のために新しい秩序を作り出しているつもりだと述べている。「絵画は、決して実在するものの再表現ではない。実在するもの以上の生命感をもって訴えかけるものが創作できなかつたら、描く為の意味は空しい」と続けている。

杉山はある人から「あなたの表現は、時間的に静止している」と言われたという。そこには無意識のうちに自分が永遠性を求めているかも知れないと述懐している。そして杉山は自分が描く空間に、限りない拡がりをもたせたいと希求している。杉山は古代の美術品には人間本来の姿、なにもものにも拘束されない原型が存在しているように思われ、そこに永遠性があり、自由で無限なひろがりがあり、その雄勁な表現を新しく自分のものにしたいと念じている。

#### (6) 杉山寧についての病跡学的検討

杉山に明確な精神的不調があったと記された記録はない。結婚後、1938年秋に結核罹患し、1951年に『エウロペ』を発表するまでの約13年間は闘病期間であり、画壇の第一線から身を引いて過ごしているが、その間に何らかの精神的不調の記録は見つからない。画壇の表舞台からは姿を消していたが、絵筆は執り続け、辛抱強くスケッチを繰り返し、宋元時代の絵画の中に古典の美を追究するなど地道な日々を送って

いる。

その後、抽象画の時代を迎えるが、1962年冬にエジプトに出発する辺りでは「絵というものがだんだん判らなくなってきた」と漏らしたといい、寺田(1971)は杉山が絵画崩壊の不安、危機にあったのではないかと指摘している。精神的危機にあったことは事実かも知れないが、杉山はエジプトから帰国後、スフィンクスを題材とする作品を世に問い、「悠久の時」の表現に挑戦し始めたかのような作品群を生み出す。杉山の作品には一貫して「精神性の追究」「永遠なるもの」がテーマとして流れており、その姿勢には加藤の指摘する「超越性への強烈な志向」を見ることができる。加藤(2007)は「統合失調スペクトラムの人の生の定常点は、俗世間ないし、平地、地上ではなく、俗世間から離れた脱世俗的世界といえる天上や山にあるとみることができる」と指摘している。加藤(2007)は統合失調スペクトラムには統合失調気質から統合失調病質、統合失調症型人格障害、そして統合失調症、ひいては統合失調症近縁性の統合失調感情障害、非定型精神病などがプロットされ、後世に大きな影響を及ぼした高い質の創造活動をする天才的な芸術家や思想家の多くは統合失調スペクトラムに属する人格構造を持つと述べている。加藤は純粋で繊細な感性を備えた統合失調症スペクトラム圏の人々は偽善と打算、虚偽の横行する世俗の社会に馴染まず、そこに錨をおろして住み込むことができず、世俗的社会に迎合して生きることを拒否すると述べている。そして、世俗的社会の中で生きる困難さを一つの要因にもつ実存の不安定性をもった彼らのあるものは、Nietzsche, F.W.のように、世俗的世界の欺瞞性、虚偽性を激しく糾弾する思想を創出するという。

杉山は栄華の頂点を極めても、それに固執することなく、俗世間から一歩退き、創作に専念

する生き方を展開している。杉山には精神的不調をきたした明確な記録はなく、精神科受診歴もないが、加藤の視座を援用すれば、「永遠なるものへの希求」「世俗的社会に迎合して生きることの回避」「夜型志向」「乾いたものへの渴望」「光に対する感覚過敏」などの観点から気質的には統合失調スペクトラムに位置するのではないかと思われる。

## VI. おわりに

杉山は幼少時における父との死別、絵画の父である松岡映丘との早すぎる死別、結核罹患による13年間の闘病、娘婿・三島由紀夫の自決など、その人生は決して平坦なものではなかった。一方、若くして画壇の頂点を極め、晩年においては文化勲章を受章するなど、世俗的栄華も極めていた。しかし、杉山は世俗的栄華に固執することなく、俗世間から身を引き、永遠なるものと乾いた大地を求めて雄大な表現のためまめ探究を続けた。脱世俗の世界に生きることを好む統合失調気質が人生の困難時において「退却」を厭わず、静かに潜伏することにより、結果的には心身の安定を維持し、地道な創作活動と長寿を全うすることに繋がったのではないかと考えられる。

本論の要旨は第60回日本病跡学会大会（大阪、2013年7月28日）において発表した。

## 引用文献

- 後藤茂樹編集（1976）現代日本の美術 第6巻 杉山寧 集英社 東京  
 井上靖・河北倫明・高階秀爾編集（1979）カンヴァス日本の名画 26 杉山寧 中央公論社 東京  
 加藤敏（2007）「病跡学—創造性と精神の逸脱」武田雅俊・加藤敏・神庭重信『脳と心の精神医学』

- 金芳堂、京都、pp.401-418  
 河北倫明監修（1987）20世紀日本の美術③ 杉山寧／松岡映丘 集英社 東京  
 河北倫明・野地耕一郎編集（1991）現代の日本画（8）杉山寧 学習研究社 東京  
 河北倫明監修（1991）杉山寧 日経ポケット・ギャラリー 杉山寧 日本経済新聞社 東京、  
 川口直宜（1987）杉山芸術を流れる河 三彩 479巻 pp50-52  
 年譜 杉山寧（1987）三彩 479巻 pp56-62  
 日本経済新聞社 杉山寧展（1996）—永遠の造形を求めて— 日本経済新聞社 東京  
 野地耕一郎（1991a）＜エウロペ＞—沈黙の論理— 現代の日本画（8）杉山寧 学習研究社 東京 pp105-107  
 野地耕一郎（1991b）杉山寧—永遠を奉じる人— 現代の日本画（8）杉山寧 学習研究社 東京 pp108-115  
 小川正隆（1979）杉山寧—その人と芸術 井上靖・河北倫明・高階秀爾編集 カンヴァス日本の名画 26 杉山寧 中央公論社 東京、pp92-95  
 小川正隆（1987a）永遠の美に寄せる賛歌《『穹』》 河北倫明監修 20世紀日本の美術③ 杉山寧／松岡映丘 集英社 東京 pp37-41  
 小川正隆（1987b）完璧を求めつつ変貌する知性の画家 河北倫明監修 20世紀日本の美術③ 杉山寧／松岡映丘 集英社 東京 pp46-52  
 尾崎正明（1989）杉山寧の芸術 日本経済新聞社 杉山寧展 —永遠の造形を求めて— 日本経済新聞社 東京 pp10-15  
 杉山寧（1989）画作の余白に 美術年鑑社 東京  
 田中穰（1976）杉山寧の人と芸術 後藤茂樹編集 現代日本の美術 第6巻 杉山寧 集英社 東京 pp77-92  
 谷川徹三（1979）杉山寧の世界 井上靖・河北倫明・高階秀爾編集 カンヴァス日本の名画 26 杉山寧 中央公論社 東京、pp85-91  
 寺田千壘（1971）杉山寧の芸術 獲得と喪失したもの 三彩 273巻 pp23-27

*Abstract*

## Yasushi Sugiyama —Pursuit of Eternity—

Mariko MATSUDA

Yasushi Sugiyama was a famous Japanese painter who lived through the periods of Meiji, Taisho, and Showa. In 1909, he was born as the eldest son of Ukichi Sugiyama who ran a stationery shop in Asakusa, Tokyo, and his wife, Michi. As his father died when he was six, his mother raised her two sons by herself. In 1928, he entered the Department of Japanese-style Painting of the former Tokyo Art School, and studied under Eikyu Matsuoka, a younger brother of Kunio Yanagida. His graduation work painted in 1933, "No" (field), won the first prize, and he soon attracted attention from the art world. He married a lady named Motoko Shinohara at the age of 27. Following the death of his mentor, Matsuoka, he developed tuberculosis and struggled with the disease through his 30s. When he was 42 years old, "Europe" (1951), presented at the 7th Japan Fine Arts Exhibition, attracted great attention. In 1958, his eldest daughter, Yoko, married a writer, Yukio Mishima. From around 1970, when Mishima committed suicide, Sugiyama started to draw a series of (five) pictures of naked women under the theme of a hymn to life, and received the Order of Cultural Merit in 1974. However, following this period, he retired from public life and stopped sending his drawings to public exhibitions. From around 1980, he drew a series of fantastic pictures with serenity set in Cappadocia, which give the impression that time had stopped in them. In 1993, Sugiyama died on the morning of his 84th birthday.

There is no recorded evidence suggesting that Sugiyama had psychological problems or consulted a psychiatrist. However, according to Satoshi Kato's view of his personality, Sugiyama might have had schizophrenia spectrum disorder, since he pursued eternity; refused to pander to secularity; was a night person; longed for aridity; and was hypersensitive to light. His life was full of ups and downs; Sugiyama had been through the deaths of his biological father in early childhood and Eikyu Matsuoka - his mentor father-figure, a twelve-year battle with tuberculosis, and the suicide of Yukio Mishima, his son-in-law. Although he was at the height of his prosperity as a winner of the Order of Cultural Merit at one stage in his life, he did not cling to that worldly success. He withdrew from secular society, and continued exploring powerful and dynamic expressions to search for eternity. As he had a schizotypal personality and hoped to withdraw from the world, Sugiyama did not think twice before secluding himself to live in quiet retirement. This eventually helped him maintain both his mental stability and physical health,

and he was able to live long, devoting himself to his creative activities.

Key words : Pursuit of Eternity, Longing for Aridity, tuberculosis